



アリアンサ富山村創設の父

松沢 謙二 (1901~1963)

松沢謙二は、明治34年(1901)中村慶治の次男として金沢市に生まれた。父の勤めの関係で県立富山中学校(現県立富山高等学校)に入学。大正11年(1922)東京帝国大学(現東京大学)農学部農学実科卒業、同年、農商務省(現農林水産省・経済産業省)農事試験場に勤務した。大正14年(1925)福野農学校(現県立南砺福野高等学校)の教諭となり、専門の蔬菜学の他に土壌学・肥料学を担当した。クマさんの愛称で親しまれ、温厚で実直、しかも人情家であった。

当時の県知事白上佑吉は、ブラジル移民に熱心で、県内の政財界人に呼びかけて昭和2年(1927)、富山県海外移民協会を設立し、アリアンサに約3250haの土地を購入し、移民の募集を進めていた。かねてから「将来の日本は海外に進出しなければならない」との主張をもっていた謙二は、この移住計画に心動かされ、いち早く協会幹事に応募し、その情熱を知った知事から協会幹事を委嘱され、現地責任者として先発派遣されることとなった。

謙二は、高岡市新横町の松沢松次郎の養女玉喜と結婚し、昭和2年(1927)松沢籍に入る。玉喜は小学校に勤める傍ら福野町(現南砺市)の柴田病院に通い、救急看護と助産学を身に付け、アリアンサでは貴重な存在となった。同年6月、富山村建設の先発隊として松沢夫妻はじめ4家族11名が「さんとす丸」で神戸港を出港し、サンパウロ州ミランドポリス市第三アリアンサ地区に入植した。

信濃海外協会の協力を得て事業に着手するが、想像を絶する未開の原始林の開拓に心身ともに疲れ、加えて謙二は、入植者受入責任者としての過酷な日々、マラリアに侵されながら業務を進めた。昭和3年(1928)第1回移民24家族121人がアリアンサに到着するも、予想外の荒野に失望しその責任を謙二に問う声も多く、その説得に精力を使い果たした。県や協会が移民を募集した際の案内文には「4, 5年苦勞すれば一財産できる」との謳い文句があり、それを信じ富山で資産を処分し渡航費用に充てた人がほとんどであった。当時の日記には「県での無法な宣伝に驚く」と悲憤する記述や、「経営資金オクレ松沢神経衰弱猛烈、申訳ナケレドヤメタシ松沢」の電報を打ったとの記述が残されている。県からの送金は数年を経ずして途絶え、建設資金は極端に不足し、開拓を滞らせる原因となった。

入植者は、謙二の説得に応じて開墾を終え、コーヒー・とうもろこしなどの栽培に精を出し、数年かけてようやく安定した生活に入った。アリアンサ富山村への入植は、昭和12年(1937)までに141家族531名にのぼる。謙二は、入植翌年には仮校舎を開設、昭和6年(1931)本校舎・図書館を作り学校教育の途を開くなど建設に尽くした。しかし、彼の勤める富山移住事務所は窮乏の悪化の一途をたどり、昭和8年(1933)ついに閉鎖となった。その後は、一開拓民として、牧場の管理人、農耕の手伝いなどで生計を立てたが、マラリアの再発で病床につくことが多く、昭和38年(1963)に苦難の一生を終えた。享年62歳。

昭和39年(1964)、海外移住功労者として、富山県知事表彰を受けた。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



不屈の精神で世界一の製鉄業を目指し地域振興に尽くした実業家

大谷 竹次郎 (1895~1971)

大谷竹次郎は、明治28年(1895)小作農であった父次兵衛、母いとりの次男として、西砺波郡正得村(現小矢部市正得)に生まれた。17歳で上京し、力士の夢を諦めた後、兄と共に町工場で働いた。これが実業家としての第一歩である。

軍需景気に乗り、また災害を乗り越えた結果、兄弟で経営する東京ロール製作所は業績を大きく伸ばした。そして、昭和9年(1934)、兄の命を受け尼崎市に工場を建設し、竹次郎単独による事業経営が始まった。

竹次郎の夢は、高炉を造ることだった。日本で高炉がある製鉄所を完成させたが、軍の命令で火入れを見ることはなかった。また、戦後再び高炉造りに挑戦したが実現できなかった。しかし、電気炉においては世界一を成し遂げた。昭和電極(現SECカーボン)は、昭和37年(1962)に世界最大の電気炉に用いる24インチの太物電極の製品化に成功し、太物電極のパイオニアとして今日でも世界から高い評価を受けている。

このように竹次郎は、多くの会社経営に携わり、日本の製鉄・鉄鋼業をリードした。また、常におごらず質素に生活し周り人々を大切にされた。その思いは、生まれ育った小矢部市や西宮市の地域振興にも表れている。

不屈の精神で世界一を目指し、度重なる困難を乗り越え、資産を地域振興に役立てた大谷竹次郎は、昭和46年(1971)11月、76年の生涯を静かに終えた。